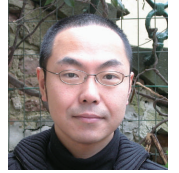


# 生き続ける都市と建築

## 第2回

### ローマの都市と建築

黒田泰介 | 関東学院大学建築・環境学部 教授



#### はじめに

古くはローマ帝国の首都として栄え、中世以降はキリスト教の聖地として歴代教皇が治め、今日もイタリア共和国の首都であり続ける永遠の都ローマ。この由緒ある都市には、長い歴史の積み重ねによって生み出された都市空間と建造物が数多く存在する。

今回は、かつてカンパス・マルティウスと呼ばれた地域に残る、古代ローマ建築の遺構を転用してつくられた興味深い事例を通じて、都市と建築の重層性と継続性について考えていきたい。

#### ナヴォーナ広場

ローマ中心部に位置するナヴォーナ広場は17世紀、ここに出身一族であるパンフィーリ家の邸宅をもつ教皇インノケンティウス10世の命によって整備された。ベルニーニによる四大河の噴水と、G.ライナルディ、ボッロミーニによるサンタニェーゼ・イン・アゴーネ聖堂がある



写真1 ナヴォーナ広場の眺め

広場は、バロック期のローマを代表する都市空間である[写真1]。ナヴォーナ広場の特徴的な細長い馬蹄形平面は、古代ローマ期の陸上競技場に由来する。

テヴェレ川の東岸、カンピドリーオの丘とクイリナーレの丘に囲まれた一帯は、放牧やローマ軍の練兵場として使われていた。軍神マルスの祭壇があったことからカンパス・マルティウス(マルスの野)と呼ばれた地域は徐々に市街地化し、ポンペイウス劇場やバンテオンなど、数多くの記念建造物が建設された。カンパス・マルティウスは紀元後80年に大火に襲われるが、ドミティアヌス帝は焼失した建物の再建とともに、この地に陸上競技場やオデオン(音楽堂)を建設して復興を進めた。

ドミティアヌス競技場(紀元後86年)は長さ276m×幅106m、内部のアリーナの規模は193×54mで、これを取り巻くローマン・コンクリート造[註]の観客席は3万人を収容したといわれる。ナヴォーナ広場北側の地下には小博物館が設けられており、広場の起源となった競技場の壁体を間近で見ることができる。

西ローマ帝国の崩壊後、放棄された競技場は建築資材の採掘場と化した。さらには強固な構造壁を再利用しながら、観客席の跡地には住宅等が建設された。構造壁が後世の建物に転用された結果、競技場の馬蹄形平面は広場を取り巻く街区に引き継がれていった。こうした遺構の構造体の転用は、ローマ起源の都市において普遍的に見られる現象である。

ナヴォーナ広場の南側には、半円形平面をした特徴的な街区が見られる。湾曲した壁面をもつこの2街区は、ドミティアヌス帝によって建てられたオデオンと、ポンペイウス劇場を起源とする[図1]。ドミティアヌス競技場と同様に、放棄された劇場は建築資材の採掘場と化した。放射状に配置された構造壁に挟まれた細長い空間=クネオ(くさび形の意)は住宅や店舗、礼拝堂などさまざまに転用されていった。劇場の半円形平面は、街区の形状にはっきりと引き継がれている。

ポンペイウス劇場跡の街区には現在、同名のホテルがある。地下のラウンジには観客席を支えていたヴォールト天井の空間が残され



図1 ナヴォーナ広場周辺の変遷。(上)グレゴリオ地籍図(1819年)、(中)ローマ期の建物との重ね合わせ、(下)現代の都市組織に見るポンペイウス劇場(左)とオデオン(中央)、ドミティアヌス競技場(右)

ており、ソファに深く腰掛ければ、自然とユリウス・カエサルの時代に思いを馳せる。

## マルケルス劇場

カンプス・マルティウスの南部には、ポンペイウス劇場に対抗してカエサルが起工し、初代皇帝アウグストゥスが完成させたマルケルス劇場(紀元前13年)が残る[写真2]。アウグストゥス帝が後継者と定めながらも夭折した、姉オクタウィアの息子の名を冠した劇場は、観客席の直径129.8m、15,000人の観客を収容し、半円状に並ぶ3層構成のアーケードには、下よりドーリス、イオニア、コリント式の建築オーダーが重ねられた。

他のローマ建築と同様に、中世には建築用石材の採掘場と化した。テヴェレ河畔という戦略的位置もあって、ローマン・コンクリート造の強固な建造物は有力氏族の要塞兼住居となった。12世紀よりファッフィ家、後にはピエールオーネ家のものとなった遺構は、14世紀にはサヴェッリ家の所有地となる。川岸にそびえ立つ姿から、ローマ劇場の遺構は当時、モンテ・サヴェッロ(サヴェッリ家の山)と呼ばれていた。

1527年にはバルダッサレ・ペルッツィによって、最頂部にルネサンス様式のバラツォが建設される。バラツォは18世紀にオルシーニ家の手に渡り、テヴェレ川に面した側が増築された。下側2



写真2 マルケルス劇場



写真3 住宅や店舗に転用されたマルケルス劇場のアーケード(1875年頃)

層のアーケードは中世初期より開口部が封鎖され、店舗や工房、一般市民の住居へと改造されていった。居住空間に転用された古代劇場の姿は、版画や古写真などの中に見ることができる[写真3]。

1926~32年に行われた修復工事では、アーケード内の店舗や住居がすべて撤去されるとともに、劇場周囲を約4m掘り下げて、ローマ期の地表レベルが発掘された。当時の修復はナショナリズムの高揚もあって、古代のモニュメントの復原が最優先とされ、遺構に堆積した都市の時間はすっかり洗い流されてしまった。地上階の柱の中程には、長年にわたる川の氾濫で上昇した、復原前の地表面の痕跡がくっきりと残されている。

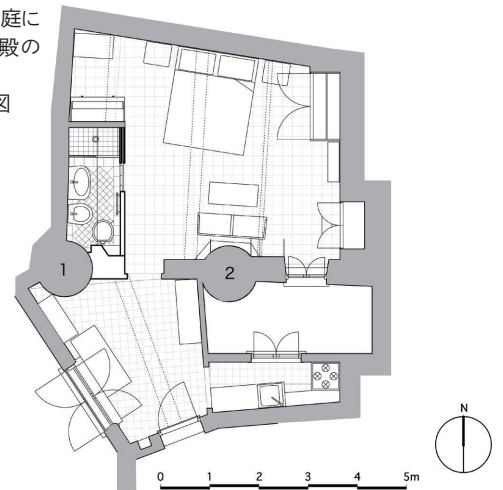
アーケード北側の端部には、ドーリス式とコリント式を重ねた当初のアーケードの姿が再現された。ここでは褐色のスペローネ石(凝灰岩の一種。ローマ一帯で伝統的に用いられる)が使われ、トラバーチンによるオリジナルの白いアーケードと明確に区別されている。オリジナルと復元部分を区別し明確化するのは、今日のレストア(修復・再生)の基本となっている。



写真4(上) オクタウィア回廊前門  
図2(右) マルケルス劇場とオクタウィア回廊 復原平面図(R.ランチャーニ、1901年)



写真5(上) L邸の中庭に表出するユノー神殿の円柱  
図3(右) L邸平面図



## オクタウィア回廊

マルケルス劇場の周囲は2002年より考古学公園として一般公開されている。太陽神アポロや戦女神ペローナの神殿跡を右手に見ながら劇場のアーケードに沿って北に進むと、大理石の円柱とレンガ造アーチで支えられた三角破風が印象的な、オクタウィア回廊(紀元前33~23年)に至る【写真4、図2】。

この場所には紀元前2世紀より、女神ユノーと最高神ユピテルに捧げられた2神殿と回廊が存在した。アウグストゥス帝は老朽化した聖域を再建し、敬愛する姉の名前を冠してオクタウィア回廊と名付ける。幅119m×奥行132mの回廊は、ギリシャ語とラテン語の図書館を備えた一大文化センターとして生まれ変わった。先の三角破風は、この回廊の前門(プロピレオ)にあたる。見えない小屋裏では転用材が積極的に使われ、破風の裏側には雑多な建物の破片が詰め込まれている。5世紀に起きた地震で前門正面の円柱2本が破損したため、レンガ造の大アーチに置き換えられて現在に至る。

帝国崩壊後、荒廃した回廊と神殿は徐々に解体され、石材は近隣の塔や住宅、聖堂の建設に再利用された。8世紀には回廊前門に張りつくようにサンタンジェロ・イン・ペスケリーア聖堂が建設される。回廊前門にはテヴェレ川で採れた新鮮な魚を商う、ローマ市内最古といわれる魚市場(ペスケリーア)が設けられた。

回廊前門から西へ延びるペスケリーア通りの歩道の真ん中には、ローマ期の円柱が立ち並ぶ。19世紀末の護岸工事で区画整理で中世の街区が取り壊された結果、回廊の円柱のみが路上に取り残されたのである。かつてのペスケリーア通りの幅は、現在の建物から円柱までの内法幅だった。オクタウィア回廊の列柱は、テヴェレ川を渡って北西のサン・ピエトロ大聖堂へと向かう巡礼用道路の軸となっていた。

回廊前門から聖堂脇を抜けてサンタンジェロ・イン・ペスケリーア通りを北へ進むと、外壁上部に大理石の円柱とアーキトレーヴの断片が残る住宅がある。地上階の内部には円柱2本が確認される。これらはユノー神殿のプロナオス(玄関廊)の一部である。

3階に位置するL邸では、これら円柱2本が玄関室と居間の壁面に露出する【図3】。居間の位置はちょうど、ユノー神殿のプロナオスの隅に相当する。壁面と一体になった円柱は直径973mm、室内の床から天井まで切れ目なく続き、表面の深いフルーティングは垂直性を強調する。柱身に穴を開けて梁を架けた痕跡は見られないが、建物の構造壁は柱間を塞ぐかたちで設けられた。円柱は壁体建設のサポートとして利用され、かつ壁と一体化して建物を支えている。

延床面積40㎡弱の住宅内で明らかにオーバースケールな大理石の円柱は、圧倒的な存在感を放っている。円柱の残存状態は2本ともかなり悪く、生活空間に直面したゆえの損耗と思われる。

中庭からは、居間に露出する円柱の背後を見ることができる。コンポジット式の柱頭は良好に残存し、柱身とともに中庭の壁面に埋まっ

写真6(左) クリプタ・バルビ考古学博物館内部

写真7(右) 公衆便所に改造されたエクセドラ(クリプタ・バルビ)



ている。柱頭のすぐ脇には隣家の窓が開き、生活感をのぞかせる。今日の生活のすぐ隣に古代のエレメントが並ぶ姿は、長い都市の歴史が積層するローマらしい風景だ [写真5]。古代建築の痕跡と日常生活空間が完全に溶け込んだ姿は、連続する都市の時間が積層する、歴史的都市の本質の一端を示している。

## クリプタ・バルビ考古学博物館

L邸を出て、通りをさらに北へ向かうと、クリプタ・バルビ考古学博物館に至る。その外観は一見、ごく普通の街区のようで、周囲の建物と区別がつかない。しかし一歩館内に足を踏み入ると、壁の仕上げや床を撤去して露出された、古代建築の力強い構造体が現れる [写真6]。この博物館は、アウグストゥス帝の友人だったルキウス・コルネリウス・バルプスが建設した劇場とその附属施設(クリプタ…回廊・神殿の複合体)の上に長年にわたって形成された、都市の時間の堆積そのものなのだ。

劇場と回廊はローマ軍の北アフリカでの勝利を記念して建設(紀元前13年)されたもので、直径95mの観客席は7,700人の観客を収容したとされる。バルプス劇場は解体が進み、遺構上にできた街区にはポンペイウス劇場やオデオンのような湾曲した壁面は見られず、僅かにクネオの一部が残存するのみである。通りを挟んだ西側の街区はクリプタの遺構が基となっており、サンタ・マリア・ドミネ・ローゼ聖堂と附属修道院、住宅等を含む約7,000㎡の街区全体は、1981年に国が買収した後、20年余にわたって考古学的調査が行われてきた。その成果として、街区と発掘現場自体がローマ国立博

物館の分館として、2013年より一般公開されている。

クリプタとは本来は地下空間のことで、ローマ劇場は舞台背後に設けられた中庭と回廊に連絡する地下通路(クリプトポルティコ)を備えることが多かった。クリプタ・バルビ博物館では生活感が残る街区内の一角に、残存する断片とワイヤフレームで復元された古代のアーケードを展示するなど、古代から中世に至る都市空間の変遷過程を建物自体に語らせている。

今なお発掘調査が続く街区内部には、回廊を挟んで劇場の向かいに設けられたエクセドラが残る。建設当初は半円形平面の小広場だったエクセドラは、ハドリアヌス帝の時代に観客用の公衆便所へと改造された [写真7]。ローマ滅亡後、エクセドラの壁龕はガラス工芸用の溶融炉に改造され、半円形の空間は墓所となり、後にはゴミ捨て場となった。積層する建築行為の深みの中から発掘された古代の空間は、我々に建築の継続性とその意義を静かに物語っている。

註 古代ローマ期のコンクリートはポツツォラーナ(火山灰)と消石灰を混入させたもので、現代のものとは構成材料が大きく異なる。帝国各地をつなぐ交通網によって広く普及し、アーチやヴォールト、ドーム構造の利用とともに、大規模な公共建築の実現を支えた。

### くろだ・たいすけ

1967年東京都生まれ。1995～98年M.カルマツシ建築設計事務所。2000年東京芸術大学大学院修了。博士(美術)。関東学院大学建築・環境学部教授。専門は建築再生計画(レストアウロ)。著書に『LUCCA 1838』(Maria Pacini Fazzi Editore、2008年)、『イタリア・ルネサンス都市逍遙』(鹿島出版会、2011年)、共著に『リノベーションからみる西洋建築史』(彰国社、2020年)など

## 自習型認定研修の設問

### 設問1

ナヴォーナ広場の元となった建築物は次のどれか。

- ドミティアヌス競技場
- マクセンティウス競技場
- チルコ・マッシモ

### 設問2

古代ローマ建築に特徴的な構造形式は次のどれか。

- 木造
- ローマン・コンクリート造
- ハーフ・ティンバー



認定教材の設問への回答は、CPD情報システムのページ <https://jaeic-cpd.jp/>

にアクセスのうえ、お願い致します。

※不正解の場合は、単位に登録できない場合があります。

※自習型教材の選択欄における会誌『建築士』選択項目は、平成28年1月より建築士会会員のみが表示項目になります。